

秩父往還歩き旅 2015



2015年12月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 甲斐の国から

■やるじゃないか、甲斐の国

2015年11月29日、私と妻は甲府駅前の大きな武田信玄像の前に立っている。明日から秩父往還という旧街道を歩くために今夜は甲府泊まりである。



甲府駅前の武田信玄像



甲府駅から武田神社へ

武田信玄像は甲府駅の南口の駅前にあるが、旅の安全祈願をするために駅の北方向にある武田神社へ向かう。武田神社までは甲府駅から歩いて30分くらい、真っ直ぐの道のりを当然ながら歩いて行く。

きれいな街並みである。最近の街づくりでは当たり前のように電線が地中に埋め込まれ、そのため電信柱の類がない。歩道も広く歩きやすい。街の掃除も行き届いており、小奇麗な感じである。文京都市らしく学習塾や予備校も多いが、華やかな看板もなく落ち着きがある。

さすが武田信玄の創った街、いや国である。治水、教育などの伝統が未だに強く残っている。戦国時代に甲斐の国は反映し、住民はみな信玄を尊敬していた。それで今でも信玄と呼び捨てにせず、信玄公と呼ぶのがこの国の習慣らしい。

幕末の勝海舟に言わせると日本国中で昔から民生の行き届いたところは甲州、尾州、小田原だそうである。甲州はここ山梨で武田信玄が治めた土地、そして尾州は愛知で織田信長、小田原は北条早雲である。勝海舟といえば皮肉屋で歯に衣着せぬ物言いで有名である。その勝海舟がほめていることが、今ここに来て初めて理解できる。

私は今までゆっくりと甲府の街を歩いたことがなかったので大変もったいないことをしてきたと反省している。

それにしても勝海舟の生きた幕末は武田信玄が没して 300 年程経った後で、そしてそれから更に 150 年も経っている。

程なく山梨大学のキャンパスを両側に見ることになる。ここも小奇麗でそれでいて落ち着きがある感じがする。日曜日の夕方ではあるが、学生もちらほら見受けられる。ちょうどノーベル賞受賞の大村智教授の祝福の垂れ幕が大きく掛けられており、記念の特別展示会も開催中である。大村教授は山梨県韮崎の出身であることを思い出した。教授が最初に出た大学がこの山梨大学の前身である。そういえばかつて日本のノーベル賞受賞者は京都大学出身の研究者が多かったが、地方の国立大学でこのような垂れ幕を掛けることができることは珍しい。私も地方の国立大学の出身なので何やら大変うらやましい。

実は、私は教授に大変興味を持っている。その功績については、いろいろな報道で紹介されているが、私が注目しているのは受賞した医学生理学の専門以外である。経営者としての実力やスポーツマン、高校では国体出場のスキー選手、ゴルフはシングルの腕前である。特に美術に造詣が深いので美術大学の学長にも懇願されて就任し、さらには私費で美術館までも作り、その美術館とセットでそば屋、温泉施設まで作ってしまう。万能の天才、まさにレオナルド・ダ・ビンチのようである。

大村教授は人生の目的が明確である。その根源は両親からの教育である。世の中の人々のためになることをしなさいと言われて育ったことが人生の目的になっているらしい。世の中の人々に役立つこと、それが大村教授の目的であり夢なのである。

それではなぜ温泉施設を作ったかという、その地域の人たちにはコミュニケーションが最も必要と判断し井戸端会議ができる場所があったらということで温泉を掘ったのである。そして、温泉に併設して美術館、訪れた人に食べてもらおうとそば屋も作った。

夢や目的があれば、具体的目標があり、目標があれば計画があり、計画があれば実行があり、実行があれば成果がある。したがって夢がなければ、計画も実行も成果もないという言葉を出した。

いつしか韮崎にある大村教授の夢の一つ、温泉とそば屋と美術館を訪れたいと思っている。

甲府駅から歩いて 30 分、武田神社が見えてくる。やや上り坂を歩いて来たので、神社の正面から後ろを振り返ると甲府の街並みが眼下に見える。その中の甲府駅までの道が一筋の線を描いている。街をやや見下ろす、落ち着きのある荘厳な神社である。それもそのはずで武田信玄が住んでいた館の跡にこの神社ができたという。由緒正しく、良いロケーションのはずである。

神社の境内も大変掃除が行き届いている。ゴミはもちろんのこと、この時期はたくさんある落ち葉もきれいに掃除されており気持ちが良い。

二礼、二拍手、一礼をして旅の安全祈願をする。お賽銭の他に御朱印代 300 円も納めたので、安全祈願だけではもったいないと思い、ついでにいろいろなことをお願いしてしまった。安全だけでも大変なのに、なんと欲深いことだろうか。

御朱印とは神社やお寺を拝観したときに御朱印帳なるものを持参してそこに拝観の証を墨で書いてもらうもので、記念スタンプのようなものである。何年か前に近所のMさん夫妻と京都旅行をしたときにMさん夫妻が御朱印をもらっていたので、以後私たちもここぞと思う寺社仏閣ではもらうようにしている。

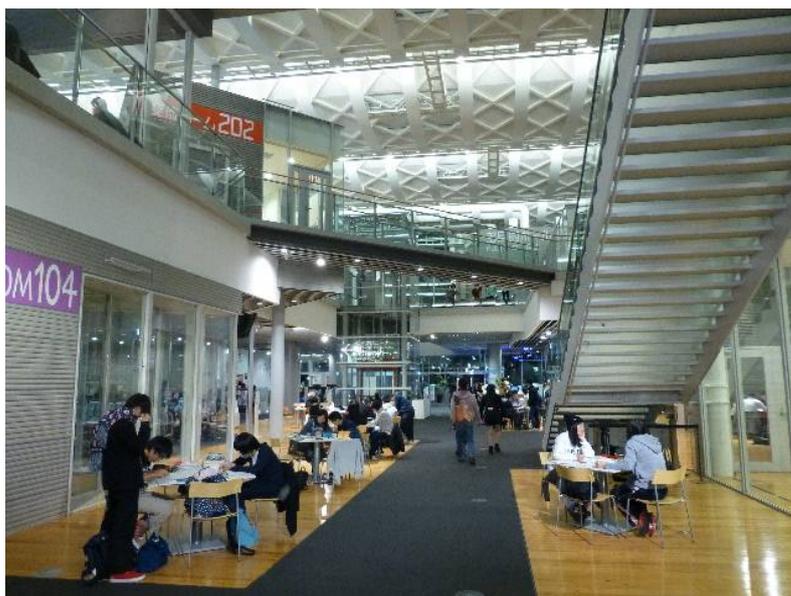
さて、駅前に戻ってきたら 3 階建てでノコギリ屋根をモチーフにしたモダンな作りの建物が目に留まる。最初はその建物が何かわからなかった。ガラス張りで結構な人数の人が見えたので、パチンコ屋か、それともスポーツジムか、喫茶店か、夫婦で推測するがわからない。どうせ暇なので真偽のほどを確認するため正面玄関から入ってみると、なんと県立図書館と看板がある。しかし図書館のイメージとは程遠いもので異次元な感じがする。未来型の図書館である。

内部は 3 階建て吹き抜けの構造で 1 階から 3 階まで一体の空間になっている。透明のエレベーターやエスカレータ、階段がうまく設置されている。閲覧エリアと交流エリアがあり、図書館を単に本を読む場所からコミュニティの場にしようとも感じられる。その発想は大村教授が作った温泉施設と同じかもしれない。年代的にも子供向け、学生向け、一般向け、高齢者向けに配慮されている。まさしく図書館によって文化を育てることを目的にしている。

図書館は文化の拠り所である。トルコ旅行に行った際にエフェソス遺跡にあるセルシウス図書館跡を訪れたのを思い出した。2000 年も前の古代遺跡でも図書館があり、その重要性がわかっていたことに感激したのを覚えている。洋の東西を問わず、時代を超えて図書館は文化の中心である。

この山梨県立図書館に 450 年前の武田信玄、いや武田信玄公が創った文化の精神が脈々と生きていることを実感する。今後は、私も信玄公と呼ぶようにしよう。

甲府、いや甲斐の国、やるじゃないか。



山梨県立図書館の内部

せっかくの甲府の夜である、名物の「ほうとう」を食べるために店に入る。店はホテルのフロントで聞いた店で、観光客がたくさん来ている。

「ほうとう」とは簡単に言うと「みそ味の野菜煮込みうどん」である。私の生まれた群馬県桐生市でも「うどん」は煮込むことが主流で、幅広い麺を使うので、「ほうとう」によく似ている。味はみそ味ではなく醤油味である。名前は「ひもかわうどん」といい「おきりこみ」とも呼ばれている。どちらが先かは別として、これらの同じような食べ物は秩父往還を通じて伝えられたのであろう。それはちょうどシルクロードのようである。

この店はいろいろな種類の「ほうとう」がメニューにあり、迷ってしまう。こういう時は店の人にお勧めの品を聞くのが一番である。標準的な「ほうとう」が1150円で、あとはそれをベースにしトッピングによって山菜やカレー味などバリエーションができるとのことである。そのベースの標準的なものが一番多く出ているというので、これを注文する。それにしてもこの「みそ煮込みうどん」のしかもベースだけで1150円とは少し高いかもしれない。

まあいいか、この街の文化への敬意と信玄公への感謝の気持ちを考えれば、決して高くないかもしれない。

■なぜ、秩父往還なのか

秩父往還とは、昔の中仙道の熊谷宿と甲州街道の甲府宿とを結び、秩父を抜ける旧街道である。現在の国道140号線にあたり、彩甲斐街道とも呼ばれている。130kmくらいの道のりになる。今回の旅行は、その秩父往還を歩いて旅する。

なぜ秩父往還なのか、なぜ歩くのか。

そのきっかけはテレビ番組である。2015年5月に放送された街道歩き旅の番組である。タレント3組が各2日間ずつ、合計6日間使って歩いて走破するというものである。

番組の中では彼らは熊谷から甲府へ歩いたが、私たちはその逆の甲府から熊谷を歩くことにし、期間も6日間ではなく5日間に短縮する。この計画を立て始めた頃はちょうど私たち家族で箱根駅伝ルートのレール&ウォーキングを楽しんでいる時期にも重なり、歩いて旅することは苦ではない。また、箱根駅伝ルートのレール&ウォーキングでは一週間ずつ休日を利用して歩いていたが、今回は5日間歩きとおすという体力的挑戦が面白そうであり昔の旅人を体験できるかと思ったのである。

妻にこの計画を話すと、なんと乗り気のようである。人生における「ハレとケ」がわかってきたかと思心する。妻は埼玉県に程近い群馬県の小さな町の生まれなので、熊谷とか秩父という土地に親近感があるようである。

そして、秩父に行くならば、京都祇園祭、飛騨高山祭と共に日本三大曳山祭（ひきやままつり）の一つといわれる秩父夜祭を体験してみたいということになり、秩父夜祭の大祭は毎年12月3日と決まっているので、この時期になったのである。

そんな訳で基本プランは夏には固まり、あれからおおよそ半年後の本日、私と妻は甲府駅前にいる。

■甲斐の国を歩く

ホテルを出て信玄公に挨拶をした後、甲府駅前から歩き出す。

天気もよく、街もきれいで歩きやすい。ちょっと洒落た市役所の横をとる。この市役所もガラス張りの近代的なデザインでセンスが良い。市役所も負けたという印象である。何も自分の住む市の市役所と勝ち負けを争っても意味のないことではあるが、やはり甲府だ、信玄公は偉いのである。

商店街の街並みが、一般民家の街並みに変わり始める。そして徐々に田舎路の一本の国道となって、広い歩道が狭くなり車の交通量も減ってくる。

おしゃれなワイナリーとレストランが見えてくる。そうここは甲州ワインの里であることに気がつく。昨夜の食事には何の考えもなくいつものようにビールを飲んだが、ワインにすれば良かったと反省しきりである。

民家には柿の木が多い。そして民家の軒下には柿を吊るして干してある。干し柿である。そんな干し柿がやたらに多く目に留まる。家によってはわざわざ専用の物干し台、いや柿干し台まで作っている。干し柿の数は半端な数ではない、商売ができそうである。この土地には干し柿の文化があるようである。なぜか懐かしい光景であり、経済的にも栄養的にも優良な保存食料は古き良き伝統である。

先日、息子の彼女が遊びに来て、山梨生まれの彼女の家では柿の木があつて、干し柿を作るのが毎年この時期の年中行事であることを楽しそうに語っていたのを思い出した。

そうか、あの笑顔はこうゆう街から生まれてきたのか。なんだか干し柿がとても幸せな食べ物に見えてくるから不思議である。



干し柿（工務店の屋上）



干し柿（民家の庭）

このあたりはフルーツの街である。道の駅やJAの直売所には柿はもちろん、桃やブドウなど看板や旗が目立って多い。そして、やはり道路も直売所も民家の前も掃除が行き届いている。決して新しくはなく古い民家でも、小奇麗でゴミが落ちていないのである。

道の駅に寄り、やや遅い昼食にする。パンを一個と干し柿を買い込んで、道の駅の中にあるイートインコーナーのようなところに座っての食事である。

干し柿 5 つが吊るされたままの姿で袋に入って 350 円である。一個 70 円は手間暇を考えれば十分に安いと思う。

久しぶりに食べる干し柿であるが、こんな美味しいのかと改めて感心する。日本いや甲斐の国の伝統の保存食は大いに見直すべしである。

少しずつ、上り坂になって、さらに田舎へと景色が変化していく。もう集落はほとんどない。

そんなとき郵便局が遠くに見えてくる。近づくとつれて郵便局は三富郵便局ということがわかる。そして、なんとこの郵便局では宝くじも売っているようで、宝くじの旗が立っている。

この郵便局は西向きだから縁起がいいと妻が言う。それより何より、ここは三富である。三つの富なのである。さっそく年末ジャンボ宝くじを購入する。

中に入ると、少し太った中年の女性郵便局員が窓口にいる。本当に宝くじを売っているのかと訊ねると、ランプを広げるように 10 枚ずつ封筒入りの宝くじを広げて見せてくれる。なんの躊躇もせずが一番上の封筒を取って、お金を払う。

甲府から歩いてここまで来て、これから川浦温泉まで歩くという話をすると、彼女は仰天している。そろそろ夕暮れで、危ないので気をつけてと気遣ってもらう。危ないというのは交通事故などではなく、動物が出ることらしい。

郵便局を出たところで、妻が帽子を忘れたと言い出す。郵便局に引き返すが、残念ながら郵便局には帽子はない。ということはどこで落としたかわからないのである。したがってどれくらい戻れば見つかるかわからない。日が暮れようとしている中、戻らないという苦汁の決断をする。

その帽子は一昨年亡くなった私の母のもので、母が愛用していたものである。ごめんなさいと心で手を合わせて郵便局を後にする。

車の旅ならばすぐに戻るが、歩き旅はそれができない。まるで人生のようである。

■信玄公の湯宿に泊まる

本日の宿、川浦温泉の一軒宿である山県館に到着する。

ここはかなり格式が高い老舗旅館である。現在の皇太子が昭和 50 年に宿泊したという碑があり、写真も飾ってある。そして金田一晴彦も宿泊して色紙をいくつか残している。

何よりも信玄公が湯治したという記録が残っている。温泉は鎌倉時代からあったが信玄公の命令で温泉宿として開発して、信玄公自身も川中島の戦い備えて入浴している。世の中に「信玄の隠し湯」というふれこみの温泉は数多くあり、そんなに信玄公は温泉ばかり入っていたとは思えない。しかし、ここは本物である。

そんな温泉にさっそく浸かることにする。

PH8.6 のアルカリ泉で、湧出温度が 43 度で加温・加水していない。湯量が多いので洗い場のカーンやシャワーまで温泉を使用している。温泉評価委員会なるものを主事して自称温泉通の私の評価も高い。温度がちょうど良く、やわらかい泉質である。

本日 41895 歩、およそ 31km を歩いた体にはこの温泉は実に心地よい。あー・・・とため息をつきながら湯に浸かる。やはりお風呂、それも温泉が歩き旅には最高である。

露天風呂に入る。外は真っ暗になりかけており、明かりがないので山肌だけで景色は何も見えない。星がいくつか見ることができる。いかにも山奥の温泉に来たという感じがする。

露天風呂は源泉が違うようで、湧出温度も若干低い。この宿は2つ源泉をもっているとのことである。泉質は似ているが、2つの源泉を楽しめるので何か得した気分である。

夕食は食事処でいただく。食事処は最近の旅館に多いタイプで畳の間にやや低い椅子とテーブルである。お客にも、配膳する仲居さんにもありがたい高さになっている。

夕食のメニューは工夫がある。山の幸が中心で、メインはすき焼きである。固形燃料で温める一人用の鍋にすき焼きの割り下がはいっており、それとは別に卵、牛肉、白菜、豆腐などのスキヤキの具材が別々に小さな器に用意されている。それらを好きなように自分で入れながら調理して食べるのである。好きに焼くからすき焼きである。すき焼きの語源に迫る料理の出し方には敬服する。

しかしながら、すき焼きの語源は諸説あり、有力な説は農具の鋤（すき）の鉄の部分で肉や野菜を焼いたというのがそれらしい。

そんなことを考えているうちに、どんどん別の料理が運ばれてくる。

その時、ちょうど運んできてくれた仲居さんから声をかけられる。歩いて来たお客様ですか？と、何で知っているのかわからない。そうか電話予約する時に歩いていく旨を伝えていたので、その電話予約を受けた男性従業員が夕暮れの旅館入口で待っていてくれて玄関で迎えてくれたのを思い出した。その男性従業員から聞いたのだろう。

その仲居さんは歩き旅の労をねぎらってくれたのと、自分は腰が悪いので歩けない分、頑張っしてほしい旨を伝えてきた。なんとなく嬉しくなってくる。こんな形で応援されることになろうとは世の中捨てたものではない。

夕食処には5組のお客が食べている。どのテーブルも和やかな雰囲気であり、時より隣の老夫婦が斜め前の別の老夫婦と話をしている。旅行の話であるが、明らかについ先ほど知り合ったようである。けれども和気あいあいの雰囲気である。

そんな時、隣の老夫婦の奥さんがこちらのテーブルにやってきて折り紙を差し出してくる。折り紙で折った独楽（コマ）である。そして実際に独楽のように回転させて見せてくれる。私は初めて折り紙の独楽を見る。それも回転している。折り紙は日本独自の文化で室町時代の発祥と言われている。信玄公より古い。

折り紙奥さんの話を聞くと、旅行に行って折り紙を配るのが好きで、旅行前には折り紙をいくつも折っているということである。珍しい？失礼、大変ありがたい趣味である。他のテーブルにも配っている。

気が付いたら食事処全体が和気あいあいの雰囲気になっている。

夕食を終え、部屋に戻り10分くらいで風呂に行くことにする。信玄公岩風呂というお風呂があり、ここは混浴であるが、とても評判が良い。混浴だが、お客も先ほどの5組で食事のすぐ後には入浴はしないだろうと考え、妻を誘っての混浴風呂である。

エレベータで宿のはるかに下ある信玄公岩風呂まで行くと、やはり誰もいない。

このお風呂は3つ浴槽があり、どれも岩風呂である。2つの源泉に対してそれぞれ浴槽があり、それらが合わさった1つを加えて計3つの浴槽である。その結果、温度が微妙に違う。好きな温

度の浴槽に浸かることができる。

昼間ならば景色もきれいなのだろうが、ライトアップはしているものの紅葉ももう終わりの時期である。それでも、ご機嫌な気分である。

川のせせらぎしか聞こえない温泉に浴していると、何やら話し声が聞こえてくる。お客が二人やってきたのである。なんと、あの折り紙夫婦の登場である。

妻はどうしようとうろたえている。私はもう夜で明るくないのでそんなに気にしないで入っていることを勧める。どちらにしても出るに出られないので妻も覚悟を決めてそのまま浸かることにしたようだ。

そして折り紙奥さんも何やら躊躇している。私は同じように混浴を勧める。

結局、4人で混浴となり、信玄公岩風呂も和気あいあいと盛り上がる。何を話したかは覚えていないが、折り紙旦那がこの温泉は初めて来たが、気に入ったということだけは何度も聞いた気がする。

朝食も食事処でいただく。朝から一人湯豆腐鍋である。一見豪華でなかなか見せ方がうまい。地元の新鮮野菜が多く、とてもヘルシーである。朝食でも感心させられる。

出かけに昨日玄関で出迎えてくれた男性従業員と会話を交わす。私たちが見たテレビの街道歩き旅の番組は、ここにも立ち寄ったが完全アポ無しで準備ができずに断ったということである。本当にアポ無しなんだとびっくりしたことを話してくれる。

歩き旅で秩父往還走破する私たちが泊まったことを旅館のホームページのブログに載せていいかと聞かれる。旅のチカラ研究所としてはもちろん快諾する。

雁坂トンネル出口まで送ってもらう。実はこのためにこの旅館を予約したのである。もともとの秩父往還は雁坂峠という標高 2082m の峠を通る。その雁坂峠とは難所で日本三大峠の一つで有名だったが、自動車は通れないし現在は廃道になっている。自動車用に雁坂トンネルができたのである。このトンネルは 6.8km であるが、前後の管理区域合わせて約 10km もある。そしてこの区間は徒歩や自転車は通行禁止になっており、自動車専用である。

テレビ番組の中ではタレントがヒッチハイクして通りすがりの自動車に乗せてもらって通過していたが、ヒッチハイクできなくても撮影機材を運ぶため後ろからついていくワゴン車に乗ればよい。

私たちがヒッチハイクを考えたが、乗せてくれる車が見つかるまで時間ロスを考えると、もう少し確実な策にする必要があった。その解はトンネルに近く、出口まで車で送迎してもらえる宿を探すことである。したがってその目的のため数件の宿に電話をかけて交渉の結果、山県館にお世話になることにした。

宿から雁坂トンネルの埼玉県側の出口までは 18km あり、トンネルの途中で県境越えをすることになる。20 分くらいであるが運転手さんにいろいろ質問をすると丁寧な受け答えが返ってくる。それでいて会話に心がこもっていることが印象に残る。従業員への教育がしっかりしている、やはり信玄公のお力だろうか。

第二章 秩父路を歩く

■何もない道

12月1日10時、雁坂トンネルの埼玉県側の出口から歩き始める。この標高は1090mであり、雁坂峠は標高2082mなのでトンネルは山の中腹をくり貫いていることになる。ここから秩父湖を経て、本日の目的地の三峯神社を目指す。秩父湖は標高530m、三峯神社は標高1100mにあるので歩く距離以外に500mの降り登りが混ざる歩き旅になる。

このあたりの国道140号線は急な斜面に無理やり作った感じで、特に埼玉県側は集落も店も全く何もないことに驚く。トンネルを作るからそこに至る全く新しく道を作ったのだろう。もともと人が住んでいない本当に急な斜面を現代の工法で山を削って作ったというものである。

道路脇から下を見下ろすと急な崖で、深い谷になっている。はるか下にかすかに水の流れる音が聞こえる。この水が秩父湖にそそいでいるはずである。そして上を見上げると山肌を切り崩した跡があり急峻な崖である。道路建設事業、土木工事とはすごいなと感心してしまう。

その急峻な崖で何やら音がするので、見上げると鹿が一頭いる。こんなところで会うのだからもちろん野生の鹿で、それも鍛えられたとびきりの野生である。なんと鹿は急峻なその崖をピョンピョン跳ねるように駆けている。鹿にとっては自分の生活圏であるが、ここに暮らす以上は足腰を鍛えないとしょうがないのである。

鹿と出会ってから延々と同じような急峻な斜面に無理やり作った道を歩く。当然狭いので道路には歩道がない。ガードレールはあるものの歩くのは車道とガードレールの間である。そこを夫婦が縦に列を成して歩く。交通量はそれほどでもないが、結構大きなトラックも走るのでそれなりに注意が必要である。

だいぶ距離を歩いた頃ようやく人が暮らす地域にでる。東京大学の施設があり、ここで初めて人に会う。東京大学は日本のいたるところに施設があり、ここは東京大学秩父演習林川俣学生寄宿舎というところである。秩父湖までの道を聞いたところ、あと7kmほどである。7kmなので20分くらいと言われたので、ここでも歩いて旅をしていることを伝えると、いつものように仰天される。いくつかるルートがあるが、歩きとなると川沿いの一番下の道を勧められ、2時間弱の行程である。

勧められた道は最も古い道で、あまり人も車も通らない。とにかく何もありませんよということである。

秩父湖とは二瀬ダムによってせき止められたダム湖である。そのせき止められた川があの特徴的な荒川である。これから先の旅はこの荒川と共にあり、熊谷から先はご存知の通り東京湾まで流れ込んでいる。私たちはその源流付近から歩いて来たことになる。そして今もまだまだ細い川で、あの荒川をととても想像できない。

本当に何もない道を1時間も歩いたころ、その細い荒川が徐々に太くなり、ダム湖の上側付近

にたどり着く。工事車両に頻繁に出会うようになる。秩父湖に流れ込んだ土砂を運び出す工事ということである。

ようやく秩父湖に到着、そして二瀬ダムの上を歩き、いよいよ三峯神社を目指す。三峯神社は山の頂にあり、秩父往還から外れて寄り道である。三峯神社には宿坊があり、温泉もあるというので面白そうなので寄り道を計画に入れたのである。ちょうど雁坂トンネルまで宿の車で送ってもらったので、この寄り道はその補てんのようなものになる。

ここから標高差 500m 約 10km の行程になる。正確には 10km は車で行く道で、車はジグザグに登っていくので、歩きの場合はショートカットが可能のため距離は縮められる。ただ距離が短くなっても標高差は変わらないので坂が険しくなるだけある。

早速ショートカットのハイキング道路を歩く、民宿や民家の脇を抜けて、通常の自動車では無理かなという道を歩く。すると前から郵便配達のアートバイがやってくる。郵便ポストのような赤い色のアートバイである。よくこんな道を降りてくるなあと感心してしまう。止まってもらい情報収集を行う。

聞くと三峯神社から降りてきたということで、途中の道路について有益な情報をもらう。山の夕暮れは早いから、そろそろ時間を気にしていった方が良いとのアドバイスをもらう。

もう、そんな時間なのかと改めて気が付く。そういえば、まだ昼食をとっていない。しかしながら食堂もコンビニもなく、食べる場所がなかったのである。旅館を出るときに水筒にお茶を入れたのでお茶はあるが、食べ物はない。

そんな時に妻がビスケットならあるということで、本日はビスケットとお茶で、薄暗い森の中の昼食とする。夜の食事は通常の旅館ではなく宿坊なので予測がつかないが、ご飯のお代わりはできるだろうから昼食の不足分はカバーできると祈りつつ、短時間で切り上げて出発する。

民家を何軒か過ぎると、やがて民家もなくなり、そのうちに「熊出没注意」の看板を見つける。通常 12 月はもう熊は冬眠の時期なのだが、これも地球温暖化や暖冬だと安心できない。

とにかく注意して緊張感をもって歩くしかない。そんな時に今度は「民家あり発砲注意」の看板がある。猟銃で熊や鹿を打つのに際しての注意喚起であるが、今はそういう場所を歩いていることを改めて認識する。

自動車道のジグザグの道を少し歩き、そしてショートカットできそうな道を登る。そんなことを繰り返しているとヘリポートが突然現れる。三峯神社専用のヘリポートのようである。さすがに三峯神社、ヘリポートがあるとは 2 つの意味で驚く。財力があるというのとそれだけ参拝者が多いということである。そしてヘリポートがあるということは、もう間もなくというところまで来たということである。

ここで地図表示案内板があり、旧参道を行けることがわかる。今度は道なき道ではなく、比較的気持ちいい山道を歩く。鳥のさえずりが時折聞こえるだけ、それ以外は静まりかえって、もちろん人間は私たちだけである。林の中、それも木々が作るアーケードの下、落ち葉のジュータンがあり、上へ上へと歩いていく。映画のラストシーンのような場面が 30 分くらい続く。



旧参道にて

登りつめて、いっきに見晴らしが開ける。標高 1100m の高さから下界を望む。そして下界を光が照らしている。ちょうど私たちの後ろにそびえる山際から冬の夕陽が沈もうとしていて、その夕陽が最後の力を振り絞ろうとして照らしているようである。その時間はほんとにわずかである。もう少し前でも、後でもこの景色には出会えないのである。

あまりにも感激的な光景である。私たち二人だけでこの感動を味わうのは本当に贅沢である。多分、三峯の神が私たちにこれから歩く予定の秩父路を示してくれたように思える。

雪化粧した浅間山をはるか彼方に確認できる。



三峯から秩父の街を望む

■三峯神社宿坊に泊まる

三峯神社に到着する。参拝して御朱印をもらう。

拝殿の前に太いご神木がそびえ、右には神楽殿、拝殿の奥に本殿、境内は決して広くはないが横の広がりよりも高さの広がりを感じる重厚な神社である。やはり標高 1100m の地である。

それにしても重機もない昔にどうやってここに神社を作ったのだろうか、やはり人々の信仰への想いは計り知れない力を生むのである。

この神社は伊弉諾尊（イザナギノミコト）と伊弉册尊（イザナミノミコト）が祀られている。この二神は兄妹で夫婦である。そして天照大神（アマテラスオオミカミ）の両親である。天照大神の両親なので、最も古い夫婦であろう。

言い伝えによれば今から 1900 年前に東の国をまわっていた日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が山犬によってこの地に導かれ、この二神を祀ったとのことで、山犬も三峯神社の守り神になっている。

社務所に隣接する宿坊の興雲閣に入る。受付時に前金で支払い、領収書の数字が縦書き漢字で弐萬四千六拾円（24060 円）と書かれている。それ以外の宿泊システムは通常の宿と同じである。建物は鉄筋でやや古い、ひと昔、いや、ふた昔前の国民宿舎のようである。

脚がやや痛い。それはそうだ、本日の歩数は 34515 歩、距離以外に標高差 500m を降りて登ってきたのだ。そして更に妻は大変である。靴の内側に足の爪が当たっているようで、爪がはがれそうだと嘆いている。大変だ、痛そうだ。

この宿には神の湯という温泉がある。足の疲れと少し冷えた体を癒すためにさっそく温泉に入る。湧出温度が低いので加温しているが塩化ナトリウム泉で、ややしょっぱい。神の湯のご利益で体はぼかぼか、疲れも取れてすっきりする。

廊下を歩いていると従業員らしいおばさんが、声を掛けてくる。歩いてきた人ですかと聞かれる。受付の時に明日のルートを相談するために、歩いて登ってきたことを話したことが伝わっているようである。歩いて登ってくる人は珍しくないが、徒歩で甲府から雁坂トンネルを抜けて来る人はいないそうである。そんな注目を浴びることが何だかうれしくなる。

夕食をとるために大広間に行く、山の幸中心にかなりの品数である。お酒も一人一本サービスになっている。

寺の宿坊は質素な精進料理が売りで、それはそもそも寺が修行の場だからである。仏教は悟りを得るために山で修行するので、寺の裏には山がついている。成田山新勝寺、比叡山延暦寺のように〇〇山△△寺と呼ばれる。

一方、神社の宿坊はお酒もありで、決して質素ではない。神社は修行の場ではない。神を祀る場で祭り場である。だから神酒もある。昔から神社はお祭りの起点であり、人々にとって「ハレとケ」のハレ（＝晴れ）の部分の拠りどころなのである。今回の旅で体験予定の秩父夜祭は秩父神社の祭りである。

神様に感謝しながら、お神酒をいただき食事をする。昨夜の旅館とは打って変わってシーンとしている。

大広間の食事の場には、一人のテーブルが4つ、私たちを含め夫婦らしいカップルのテーブルが2つ、若い女性二人のテーブルが一つで合計10人が点々と座って食事をしている。

私たち夫婦は旅館の食事処では、お客ウォッチングを楽しむことが多い。あの人たちはどんな関係か、親戚一同か、訳ありカップルか、社員旅行かなどと想像していくのであるが、本日のこの夕食は全然勝手が違う。観光か信仰かわからないが、何を目的にここにきて宿坊に泊まっているのだろうか。特に一人で来ている人は、ここで何を考え、何を祈りに来ているのか。私としては興味あるが、とても聞けない。昨夜のあの折り紙夫婦ならば折り紙を配って聞くのだろうか、でもとてもそのような雰囲気ではない。

まあ、私たち夫婦も他の人から見れば奇妙に映るのだろう。人間とはお互いを感じるもので、不信感には不信感、友好には友好である。苦手な人に対して、まずその人を好きになることで、お互い気脈を通じる関係になるというものである。

そんな大そうな話ではないが、一種独特な夕食会場である。

ここは標高1100mの三峯神社の宿坊で、夜は静かで早い。神の湯にもう一度浸かり、私たちも早めに休む。

神社の朝は早い、8時前には朝食を終える。神主の服装をした人たちが忙しく走り回っている。いや、走ってはいないが、急ぎ歩いている。そんな光景を観察しながら、ロビーを散策する。

興雲閣はお札や絵馬を売っている社務所売店の裏側つまり事務所側と直結しており、外に出ないでお札や絵馬が買える。ここは縁結びの神だそうで、さっそく縁結び絵馬を買う。息子への土産にと妻が言いながら、お金を払う、いやお納めする。買うのではなくお納めするのである。ここは神聖な神社である。

ところが、そんな買い物の最中である、「〇〇部長！」との声が事務所内部で聞こえる。聞きなれた日本語であるが、この場所には何かなじめない言葉である。

神社といえども、ここは仕事をしてその対価として給料が支払われる組織である。だから部があり課もあり、そして部長もいれば課長もいるはずである。それは当然のことではあるが、なんだか妙な感じがする。なんとなく絵馬のありがたみが消えていくような気がする。

外に出ると、玄関の温度計は気温3℃を指している。身が引き締るとはこのことだろう。

そして、朝の神社は、またまた発見が多い。拝殿の奥にある本殿で何やら儀式をしている。数人の神主が、笛を吹きながら、本殿から拝殿に物を移動させている。何だかわからないが、笛の音に聞き入りながら、見物する。

やはり、宿泊するといろんな光景に出会える。通常は朝早くからこんな由緒正しい神社にいないからである。

■三峯神社から秩父の街へ

三峯神社は自動車道路やケーブルカーができるまでは、徒歩で入山するための山登りの道しかない。コースは表参道とタケルの道と2つある。タケルの道は昨日登ってきて、途中からこのタケルの道に入ったようである。

本日は表参道で下山することにし、最終的には国道 140 号線の大輪のバス停付近にでる。

まず、下山の前に下界が一望できるという遥拝殿なるところに行く。昨日の興雲閣受付時に下山ルートをいろいろ聞いたおり、ここもそのお勧めスポットである。確かに下界一望で景色が良い。朝なので空気も澄んでいる。これはこれで壮大で綺麗なのであるが、

私にとっては昨日見た光景が忘れられない。感動というのは単に綺麗、雄大だけではないのだろう。それまでの苦労や、ある特別な時間での巡り合わせなどに左右されるものである。そう、人は特別という言葉や扱いに心動かすのである。だから、接客の極意は「あなただけ特別です」なのである。

さて、標高 1100m からの大輪の標高 500m までの標高差 600m の降りの道のりである。脚には楽であるが足の指にはつらい下り坂である。妻の足の指は悲鳴をあげているようで、ペースが上がらない。ゆっくり行くことにしよう。時間はたっぷりある。

小鳥のさえずりが時折聞こえるが、静かである。当然、誰とも会わない。もくもくと降りていく。今日は水曜日、こんな平日にしかも朝早くに、表参道とはいえこんな山道を登ってくる人はいない。車で登るのが当たり前である。

しかし、1 時間ほどしてからか、一人、そして 4 人、そしてまた一人、計 6 人と出会う。およそ 2 時間半の間に 6 人である。少ないとも多いとも何とも言えないが、この人たちは何を求めてこんな山道を登ってくるのだろうか。それを聞きたい気持ちもあるが、すれ違う人たちは、この夫婦、いやこの中年男女は、何故こんな平日の朝から三峯神社から降りてくるのだろうか。と私たちを見て思うのに違いない。それは神のみぞ知るである。

急な坂道をだいぶ降りて、そろそろ勾配が穏やかになってくる。空間が開けて、滝に出会う。高さ 10m くらいの滝で、すぐ近くに鳥居があって鳥居の前には社がある。宿坊に滝行をしている写真があったが、この滝がそれであることがすぐわかる。神聖な滝で清浄の滝と名がついている。

滝の先を歩いて行く。道端の岩に苔が生えていて、その苔から湧き水がしたたっている。妻が苔からしたたる水を手で受け、口に含む。清らかで神秘的な味らしい。神の山から湧き出たものである。苔と水と岩と木々の静寂な空間、宮崎駿の「もののけ姫」の世界である。

九州屋久島の白谷雲水峡にある苔むす森にも似ている。



清浄の滝



湧き出る水

ようやく国道が見えてくると、ロープウェイ駅の跡がある。ロープウェイは1939年から2006年まで運行していたが、現在は廃止され土台だけが残っている。そこを通り過ぎ石畳を歩くと、荒川に出る。荒川の川幅は10mくらいになっている。橋を渡ると大輪のバス停に到着する。バス停付近はみやげ物屋が数軒あるが、どこも営業していない。昔は秩父往還から三峯神社表参道に行く分岐点でにぎわいを見せていたのであろう。

ここからまた秩父往還に戻る。国道140号線である。道路は時々トラックの往来があるが、人には出会わない。民家もあるが、人には出会わない。そんな時に民家の屋根を見上げると数匹の猿が屋根や軒にいるのを発見する。野生の猿がこんなところまで、しかも何匹もいるのである。人に出会わない代わりに猿に出会うとは、これが秩父かと感心してしまう。

そういえば、今回秩父を歩くということを友人のOさん夫妻に話したら、秩父に行っても平日は誰もいないということをその奥さんから聞いていた。奥さんは秩父出身である。情報は確かだった。まさしく誰もいない。しかし猿はいる。

それにしても秩父路に入ってから鹿に会い、そして猿である。それでも熊には会っていないのが幸いである。

秩父鉄道の終点の駅である三峰口駅に到着する。

駅前には食堂が3軒くらいある。もう少しにぎやかかと思っていましたが、それでも食堂があること、それも複数軒あることがすごいと感じるようになる。

そして、食堂の入口の戸が開いておばさんが顔を出し、食べていかないかと客引きである。滅多に人が通らないからか、人の気配に敏感で2軒くらいから声をかけられる。きっとお茶でも飲みながら店の中から道路をぼんやりとずっとながめていたようである。

昼食どきは過ぎていたが、あまり空腹でもなかったのでやんわりと断り、無人の駅の休憩室にはいる。ちょっと休むつもりで入ったが、昼食抜きという訳にはいかないので、簡単な昼食をとることにする。

宿坊の部屋に置いてあった瓦せんべいのような菓子を朝出かけにリックサックに入れてきたので、夫婦で1枚ずつ食べ分ける。今日も質素な昼食である。

そしてまた、何もない誰もいない街を歩く。干し柿が少し干してある民家を見かけるが、山梨のように大量ではない。大根も干している。ここは山梨のようなフルーツの里ではないのである。昔ながらの生活の匂いがする。

庭に社がある民家が多い。小田原を歩いた時にも同じような光景があったが、小田原では社の前に必ず鳥居があり、一対になっていた。ここでは鳥居と対になっている社を全く見かけない。鳥居は神社における門であるが、門を省略したということか。

あれこれ考えて街を歩くのは楽しい。

そういえば、ほうとう屋は全く見かけなくなり、代わりに秩父そばの看板を多く見かけるようになる。うどんが蕎麦に変わったのである。蕎麦は痩せた土地に向いている。川が上流の土砂や木々、草花を運び、肥よくな土地になるのであるが、やはりここ秩父は山である。関東にありながら地形的には信州そばで有名な隣の長野県に似ている。

秩父の集落は秩父鉄道沿線に点在する。いや集落を結んで鉄道をひいたので、当たり前である。私たちの秩父往還歩き旅もこれからはその秩父鉄道沿線を歩くことになる。

妻の足が悲鳴をあげている。下り坂から平地になったが、だいぶダメージを受けているようである。とはいえ、まだ時間が早いので距離を稼ぐことにして、宿を過ぎて秩父鉄道の影森駅まで行く。そして電車で武州日野まで戻り、本日の宿泊先の旅館の車で駅まで迎えにきてもらう。

■顧客ターゲットが明確な宿

秩父温泉はなのや旅館に到着する。

平屋建てで階段もエレベータもない宿である。土地が安いからできることではあろうが、高級感を漂わせて面白い。

インターネットでの評価はかなり高い宿であり、リピータが多いとされているこの宿の特徴が見えてくる。

接客は若い男女の従業員が対応してくれている。荷物を持ってきて、宿の説明などをしてくれる。多くの宿では結構年配の仲居さんが担当するものであるが、美男美女の20代前半の若ものが丁寧に対応してくれる。

私たちが通されたロビーにはちょっと高級そうなコーヒー自動販売機が設置されていて、無料開放されている。小さい子供向けの遊び道具も結構そろっている。小さい子供というのは乳飲み子や幼児である。

部屋に通されると、重厚感はないが新建材を使った昨今の建築で、きれいな作りをしている。老舗の旅館では感じない、おしゃれなペンションに来たようである。

部屋の中で目につくのはイオン発生器、豊富なアメニティ、そして庭には露天風呂が各部屋についている。いわゆるマイ露天風呂である。

そのマイ露天風呂に入らずに、さっそく大浴場に向かう。大浴場といっても浴槽は内湯で5人くらい、露天風呂で3人くらいまでの大きさである。お客は各部屋のマイ露天風呂に入るのであまり大浴場には来ないようである。私が入浴中は誰も入ってこなかったのも、結果としてここでも貸し切り風呂になっている。温泉は沸かし湯であるが温度管理はきっちりされている。カランのところには五種類のシャンプー、ソープ類が用意されている。

この旅館のターゲット層がハッキリ見えてくる。ズバリ！若いカップルと若いファミリー層である。小さい子供がいると結構周りのお客に気を遣うもので、しかし羽は伸ばしたいのである。さらには訳ありのカップルなどにも向いていそうである。

食事は個室スタイルの食事処でいただく。他のお客様と顔を合わせないような作りになっている。料理は創作料理である。これもターゲット層の違いである。

それにしても和気あいあいの食事会場だった2日前の旅館とは対照的である。どちらを好むかは旅の目的やお客様の価値観で決まるので軽々には言えないが、この差が面白い。

ついでに言えば、三峯神社の宿坊での食事を思い出す。あの大広間の一人テーブルで黙々と食べていた一人旅の方々にも旅の目的があったはずで、あの時一人でも二人でもそれを聞いておけ

ば良かったかと今になって後悔している。

現代においては、お客様を絞るという手法は極めて重要である。一般的にはセグメンテーションと呼ぶが、どの層のお客様に自分たちの旅館が持っている魅力が合うか、あるいはどの層のお客様を狙うかで、設備や従業員を変えていくのである。かえって万人受けするようなものはなかなか難しい。特に旅は、旅人により目的が様々である。

旅人のタイプを絞り込めれば、その要望に特化した対応が可能になる。結果としてお客様の満足度が上がり、リピータが増えるのである。

私は会社生活において、経営品質という企業の競争力を高めて顧客満足や従業員満足、地域社会への貢献する企業経営の手法を勉強し推進していたが、こんなところでそれが実感できるとは思ってもよらず、感慨深い。

翌日の朝は 11 時の遅いチェックアウト、そしてお土産付きである。これも経営戦略の一つなのだろう。

そういえば、昨夜に妻が眼鏡と眼鏡ケースをなくしたと騒いでいた。どこかに忘れたのであるがどこだか分からず、今日歩いてきた駅や旅館など心あたりに電話をかけまくったが、発見できない。これも一昨年に亡くなった私の母の形見だそうである。母が愛用していたのを私も覚えている。帽子といい、眼鏡といい今回は事件が多い。

ここは信仰の山である。母があちら（冥土）でも使うから取りに来たのだろうということになり、あきらめていたのであるが、この朝に興雲閣から眼鏡ケースがあったと私の携帯電話に連絡が入る。やはり信仰の地で、神のご加護かもしれない。

■秩父夜祭

翌朝は御花畑（おはなばたけ）という駅まで送ってもらう。こんな駅名があるのかと思わず妻と顔を見合わせてしまう。この駅は秩父の繁華街にあり、市役所に程近い。

本日は 12 月 3 日木曜日である。秩父夜祭の大祭の日である。

まだ昼前ではあるが秩父夜祭に興奮している街の様子がうかがえる。平日だというのに小中学生の姿も多く、家族や友人グループでそろって街を歩いている。きっと学校はこの日は休みで、会社や工場も臨時休業なのである。

街の中は夜店屋台がいっぱい並んでおり、買ったり食べたりしているお客でにぎわっている。一般的な露天商の夜店屋台だけではなく、テントの中にテーブルをいくつも並べた食堂タイプの屋台も多い。いろいろな屋台を見ることができる。

昼間の参道や街を歩く。この夜祭の中心である秩父神社に立ち寄る。何やら儀式の最中であるが、簡単に参拝だけ済ませて神社を後にする。

西光寺という寺にも参拝する。ここは秩父 34 霊場の一つでもあり、関東 88 か所霊場巡りの特別霊場でもある。私たち夫婦は関東 88 か所霊場巡りを実行中であり、御朱印をいただく。

さて、暗くなるまで半日あるので、長瀨まで歩くことにする。長瀨には宝登山（ほどさん）神

社があり、三峯神社と秩父神社と合わせて秩父三社と呼ばれる歴史ある神社である。34 霊場も含め秩父が信仰の山と呼ばれる由縁である。

その宝登山神社に向けて歩く。どこにでもあるような郊外の街道風景であるが、秩父そばの店が目につくことが違うくらいである。

私たちが秩父を下山する方向に歩いていると、多くの観光バスが秩父に行く方向に向かってきてすれちがう。バスは観光客をたくさん乗せている。秩父夜祭の観光ツアーがたくさん組まれており、そのツアーバスのようなものである。1 台 2 台ではなく、何十台とすれちがう。あの誰もいない街にこんなに人が集まるのか。

本日休みの貼り紙の会社や商店も多い。街道は夜祭に突き進んでいる。そんな街道を夕暮れに向けてひたすら歩く。荒川の川面には夕陽が映っている。金色の川のようにも見える。

そして宝登山神社にたどり着く。一般的には夕方 5 時まで御朱印をもらえる。それにギリギリ間に合う。もう薄暗い境内であるが、参拝して看板などを見て回る。

今から 1900 年前に日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が東国遠征時に遭遇した山火事を山犬が消してくれたので火止山（ほどやま）となったとのことである。祀ってある神は初代天皇である神武天皇、そして山の神と火の神である。

三峯神社も犬、ここ宝登山神社も犬に助けられ神社ができています。秩父の地は山犬が多かったのか、それが人々と共存することができたために山犬信仰があるのかもしれない。

神社は重厚な作りで、歴史を感じる。さすが秩父三社の一つである。そして夕陽が神社を照らし、金色の部分輝いて見える。これも夕方のこの時刻だから見ることができる。



金色の長瀬荒川



金色の宝登山神社

さて、暗くなった長瀬を後に電車で秩父駅へ戻る。この電車もちろん満員である。

都会の満員電車を経験したことのある私にとっては珍しくないが、そんな経験のない地元の人々は満員電車の乗り方がわからないようである。例えば荷物を棚に上げるとか、前に抱えるとかということをしていないので、混雑はより一層強調される。そんなことをわざわざ教えるようなことはかえって野暮なことと思い 20 分間我慢をする。

それにしても先ほど 3 時間以上かけて歩いて来た道を 20 分で戻る。やはり電車は早い。

いよいよ秩父夜祭の本番である。

この秩父夜祭は曳山祭りである。太鼓と鐘のリズムに合わせてワッショイの掛け声で山車を引く。2本の綱をそれぞれ男女混合100人くらいで引いている。その前や横、後ろに先導役や交代要員が引手と同じくらいいる。掛け声と太鼓、笛が寒い夜空に鳴り響いている。勇壮な祭りであるがなんとなく間延びしていると感じてしまう。昨年、博多山笠を見た時のような感動を感じないのである。

私は秩父夜祭の構成要素は3つあるように感じる。この山車を引くこと以外に、花火と夜店屋台である。

秩父夜祭の花火は約7000発ということで、多いのか少ないのかよくわからないので他と比較する。隅田川や長岡の花火大会は20000発くらいなので、規模的には小さいが花火がメインの大会ではなく、夜祭がメインということと、冬の花火としては異例であると思う。

そしてもう一つ、夜店屋台が多いことである。昔ながらの綿あめ、焼きそば、大判焼きなどに加えて最近はやりの全国B級グルメが全国から参戦している。さらにトルコのケバブやメキシコのタコスなど海外組が参戦している。もちろんそれらのほとんどは外国人がやっている。

その種類の多さと店の数の多さにびっくりする。私もいろんな祭や縁日、イベントに行っているつもりであるが、こんなに多いのはあまり記憶にない。街中が夜店屋台でびっしりである。

そしてそれらの店は全国から集まっているようである。売っているものでもわかるが、実は偶然に発見したことがある。

各屋台ではプロパンガスを使用しており、そのガスボンベには販売所の所在地表示がしてある。広島お好み焼きの店ではガスボンベに広島の住所と販売店名が記載されている。福岡、大阪、静岡など同様である。

妻にこの発見を話すと、確かにそうだねと言う。

ここは群馬の焼きまんじゅうだ、確かに前橋のプロパンガスを使っている。いっぱいあるから、次はどこ、次はどこ、というように夫婦二人でプロパンボンベだけ見る奇妙な祭り見物になってきた。こんな楽しみ方も面白い。

広島お好み焼きをやっている店のお兄さんに聞いてみる。どこから来たのか？広島からだと言う。今度はどこへ行くのか？次も関東で〇〇だと言う。この人達は一年中、全国を旅しているのである。いや旅ではないか、日常の仕事である。そう、それがこの人たちの日常である。



山車と花火と夜店、秩父の冬の夜はにぎやかである。観光客も確かに多いが、やはり地元の人々が楽しんでいるように見える。祭は地元の人が日常から非日常に脱皮するための催しであり、皆が楽しむために祭がある。

夜祭のために実は宿が取れない。だいぶ前に予約しようとしたが、この日だけはどこも宿が取れなかったのである。それでも熊谷のビジネスホテルは空いていたので、祭り見物後に1時間かけ電車で熊谷に移動するプランにしていた。

夜も更けて、寒さが身に染みてきた。時間はもう10時である。花火が盛大に打ち上げる中、秩父をあとにする。電車はもちろん満員である。

第三章 関東平野、熊谷へ

■ラスト一日最長距離を歩く

12月4日朝、私たちは熊谷から長瀨行の電車に乗っている。昨夜の祭りの興奮が嘘のように電車も街も平静を装っている。

旅の最終日である本日の予定は長瀨から熊谷までを歩く。長瀨は埼玉一番の観光地であり川下りで有名で、その歴史は百年も続いているそうである。百年はすごいが百年前の昔はどのように舟を運んでいたのだろうか、今は川下りをした舟はトラックに積まれ、上流に運ばれる。だから上流から観光客が乗り、川下りができる。ではトラックのない昔はどうしていたのだろうか。夫婦の間で疑問がわいてくる。

観光案内所が駅前にあったのでその受付嬢、いや受付おばさんに聞いてみるが、どうもよくわからないようである。いろいろ話しているうちにきっとトラックの代わりに馬だろうということになり、私たちも納得する。

しかし、後日調べたらどうも人力で戻っていたようである。本当に大変である。

この観光案内所で旅の目的を言い、ルートや見どころを聞くと、荒川を挟んで国道140号線の対岸を勧められる。交通量も少なく景色が良いということである。

駅を出ると「小昼飯」なる看板が食堂風の店に掲げてある。この言葉に妻が反応する。

小昼飯（こじゅうはん）とは妻の実家の祖母がよく使っていた言葉だそうで、小腹が減った時に食べる三時のおやつのようなもので夕方頃に食べる軽い食事を意味しているとのことである。なぜか看板を見て急にその言葉や祖母を思い出したようである。妻の実家は群馬であるが埼玉に近い町である。この秩父の文化と似ているのである。

観光案内所の受付おばさんが勧めるとおり対岸を歩くことにする。桜は咲いていないが桜並木が私たちを出迎えてくれる。きっと桜の季節は綺麗なのであろうと想いながら、ホテル、キャン

プ場もある。ここは埼玉でも指折りの観光地なのだと改めて感じる。

それにしても指折りの観光地にしては人に出会わない。今、この街道は私たち夫婦二人の貸し切り状態である。

長瀬は妻の両親の出会いの場らしい。仲人さんが独身の二人を長瀬観光に誘い、途中で姿をくらまして、両親がしてやられたと思ったところから二人の交際が始まったと最近義母から聞いたのである。昔のドラマでよくあるシーンであるが、こんな身近なところにもそんな話があったとは思わなかった。それでもそこから妻の人生が始まることになるとは、実に奇遇である。今から60年以上前の話である。

そろそろ秩父の山々が低くなり、山の端がなくなりつつある。この山がなくなると関東平野が広がるという地点である。そしてそこが寄居という町である。寄居とは甲州の侍や小田原の浪士が寄り集まって住んでいたから、寄って住む、寄居らしい。

歩いてみて分かったことはここから関東平野が始まるということで、逆に言えばここで関東平野が終わり秩父山地に入ることである。

風がすごい。平地に出たら遮るものがなくなり、風をまともに受ける。平地、それも関東平野に出てきたことをここでも実感する。

そば屋はあるが、わざわざ秩父そばをかかげる店はそんなに多くない。それよりもそば屋だけでなく、うどん屋やラーメン屋など麺の種類が増え、さまざまな店が多くなる。やはり関東平野に出てきたのだ。

歩いていると「牧場直営レストランとんふみ」なる店が目にとまる。牧場直営というのと、そして「とんふみ」である。妻の名前が史江(ふみえ)なので、なんとなく親しみを感じてここで昼食をとることにする。

平日のそれももう2時頃であるが、それなりに混んでいる。ランチメニューとビールを注文する。何よりもビールが飲めるのが歩き旅の良いところである。乾いて疲れた体に冷たいビールが浸透していく感じがあまりに心地よい。

料理の味も量も価格も満足いくレベルにある。旅をしていて偶然でも入った店が満足いくものだった時にはとても得したような気分になる。

関越自動車道の花園ICを通過する。国道140号線はバイパスの新道と旧道があるが、旧道を歩く。さらに秩父往還はこの旧道からもずれている部分もある。

道とは、人が歩くから道ができる。その道も馬車や自動車を通るようになるとそのまま広げる部分もあれば広げるスペースがなかったり、人家があったりした場合、新たな場所に道ができる。さらに近年は交通量の増大によりバイパスができ、同じ国道名になる。道は常に進化する。

会話もなく、ゴールの熊谷警察署目指して黙々と歩く。

熊谷警察署前の交差点が現在の国道140号線の起点である。昔の秩父往還はこの熊谷警察署とは少し離れたところから始まっているのを私たちが歩こうと決めたテレビ番組で教えてくれた。その時の映像によれば、そこには碑が三つあることが分かっている。

もう夕暮れ時である。鳥が巣に戻る時間で、なぜかカラスが多い。カラスの大合唱に迎えられ

間もなくゴールである

■ 予期せぬ出来事、そしてゴール

昔の秩父往還の始まり地点を探していると、JR線の踏切を渡っている時である。突然、妻の姿が私の視界から消え、横に倒れている。

起き上がれないでうずくまっている。何が起きたのか、私にはすぐに理解できない。ただ踏切の中で妻が倒れている。大丈夫かと声をかける。妻は寒さと埃対策でマスクをしており、マスク越しに口を押えている。口の中がジャリジャリしているらしい。マスクを外して砂利のようなものを吐き出している。

どうやら大丈夫らしい、しかしここは踏切の中である。しかもJR高崎線なので結構な本数の電車が通過する。まず踏切の外に移動させることが最優先である。

踏切の外に移動して、ことの次第が徐々にわかってきた。踏切なので横断する道の部分はレールの高さになるよう木材がひいてある。悪いことにその木材とレールとの隙間に靴を挟んだので、つまずいて前のめりに転倒したようである。

受け身も取れないまま、口が木材かレールにあたり、前歯を損傷したようである。マスクのおかげで外部から砂が入ることはないが、損傷した前歯が口の中で小さなかけらに分裂したのでジャリジャリした感じになったようである。前歯のうち的一本の一部分が欠けてしまったが、血は出ていない。ちょっと見た目には分からない。でも痛そうである。

妻が今回履いている靴はトレッキングシューズで登山靴のようなものである。普通のスニーカーならば多分こんなことにはならなかったが、山道には向いていても都会歩きには向かないようである。

今回の旅では神社に参拝することが多いので、そのたびに旅の安全祈願をしていたが、最後の最後でこんな予期せぬことが起ころうとは思ってもいなかった。

しかし、歯の一部で済んだのは神のご加護かもしれない。

少し休んでから、また秩父往還の碑を探す、なかなか見つからない。

何度かここかここかと思ひ、その場所に行くが碑は見つからない。もう夕暮れではなく、夜になってきている。そんな時に歯を折っている妻からは警察で聞いてみたら、という提案のような悲痛な叫びが聞こえてくる。

そうか、目の前が熊谷警察署である。恥も外聞もなく秩父往還の碑の場所を、警察署前で門番をしているちょっと太った中年のお巡りさんに聞いてみる。

歩き旅であるということや最終地点の碑を探していることなどを話す。しかしその中年のお巡りさんも分からないということで署の中まで入ってくださいということになり、一緒に熊谷警察署に入る。

何やら同僚に聞いている。同僚も分からないということだが、聞いたことがあるという人がいて、そこから地図やパソコン、スマートフォンで調べ始めてくれている。最初は一人だったが、さらに一人、また一人と調べる人が増えてくる。

大変ありがたい話である。中年夫婦のこんなつまらない質問を真剣に調べてくれるとは、本当に申し訳ない。

妻は、お巡りさんたちが調べてくれているその間に電話をかけている。家の近くの歯医者さんに明日の診療の予約を入れている。私はその間に立って、うろうろしているだけである。

ようやく一人の若いお巡りさんが、見つけましたよと駆け寄ってくる。親切に行き方までも詳しく教えてくれる。信号二つ歩けばよいとのことで、10分くらいでいける。

親切な熊谷警察署を後に最後の力を振り絞り歩き始める。陽は完全に沈んでしまったが、秩父の山とは違って交通量が多く、車のヘッドライトや街頭の明かりで問題ない。

ほどなく秩父往還の碑を発見し記念撮影をする。道路から少し入ったところにあるので、ここは本当に真っ暗である。碑は3つあるが、実は暗くて碑の内容は読めない。でもテレビ番組で見た碑と同じである。

ここが今回の秩父往還歩き旅のゴールである。そして、あとは帰宅するのみである。



秩父往還の碑

それにしても、最後の最後で妻が転倒し、前歯の破損というアクシデントが起こるとは、勝負は下駄を履くまでわからないという言葉があるが、まさしくその通りである。

最後まであきらめるなという言葉は私は好きでよく使うが、最後まで気を抜くなという言葉も今後は肝に銘ずることにする。

ちなみに妻の歯は翌日の診療で綺麗に治り、現代の歯科技術の進歩に感謝である。いや、甲斐と秩父の神々に感謝かもしれない。

■旅を振り返る

熊谷から横浜まで、湘南新宿ラインのグリーン車に乗る。グリーン車なので弁当を食べながらビールを飲み、ゆっくりできる。このようなグリーン車内打ち上げは、私やその仲間の歩き旅ではよく使う手法である。しかし残念ながら妻は歯の負傷により飲み食いなしである。

あれこれ考えながら、妻と打ち上げ兼反省会である。

私も今まで歩き旅をしてきたが日帰りか一泊であり、今回のような連続 5 日間の歩き旅は初めてである。一日の移動距離が今回は 30km 弱であったが、少し抑えた方が良いかもしれないという反省をしている。歩き中毒（アルチュー）の私はいざ知らず、妻も一緒ということを考えると確かにつらかったと思う。それが予期せぬ出来事につながったかもしれない。

江戸時代の人、それも成人男子が江戸から京に行く場合、日本橋をたって最初の宿泊地となるのが一般的には戸塚宿らしく、距離にして約 42km である。

マラソン距離である 42.195 km に近いのは偶然にして面白い。ちなみにマラソンのその数字 42195 はシニイクカクゴ（死に行く覚悟）とも言われている。

現代人の私たちはあまり無理をせず、慣れてきたら江戸時代レベルを目指せばよいのである。

歩き旅は靴が命である。私は今回の旅の準備として靴を相当に厳選した。トレッキングシューズも持っているが、どうもしっくりこない。靴の中で足が締め付けられ感があつて、一日や二日ならば耐えられるが、連続 5 日はつらいことがわかり、結果として 3 足ほど試した。

どれもしっくりいかず、最終的にはホームセンターで履いてみた安い靴がフィットした。値段ではない、フィット感である。この靴は最後まで期待を裏切らなかった。

今回の旅の行程の 2/3 は秩父鉄道が並走している。いわゆるセーフティーネットである。

鉄道が並走している場合は、何かあったらそれに乗ればよい。秩父夜祭で秩父に宿が取れないために熊谷に泊まり、あるいは夜祭の夜になるまで時間があつたので長瀨まで歩くなど秩父鉄道にはお世話になった。

今回は幸いにして雨に降られなかったが、雨は歩き旅にはきついものである。歩き旅は競技ではない。江戸時代のように他に代替え手段がないなら仕方がないが、現代はそうではない。セーフティーネットは何かあれば使った方がよい。

旅は苦行ではない。人生を豊かにする芸術やスポーツのようなものであると私は思っている。そして日常を脱して非日常へ入ることである。

今回の秩父往還歩き旅は、面白そうだから始めた旅である。旅はいつもそんな好奇心から始まる。いや旅だけではない、人生がそうなのだ。

秩父往還は素晴らしい。秩父は信仰の山である。その信仰の山の前後に信玄公の甲斐の国があり、関東平野がある。

この 3 つの地域は明らかに文化風土が異なる。それを歩くことで感じるができる。いや歩かないと感ることができない。

歩き旅がくれるものは連続の中で変化を感じることができることである。そもそも同じ日本の

国内で地続きだからそんなに差はないのだが、ある所を境に変化するものがある。雁坂峠を境に甲斐と秩父では食べ物や生活が変わる。寄居を境に山の秩父が終わり関東平野に出ることで風土文化が変わることは、歩くことによって気が付く。

もう少し分かり易い例えにすると、エスカレータに乗るときに関東では左側に立って乗り、エスカレータで追い越したい人のために右側を空けておくのが普通である。ところが関西ではその逆で左側を空けておく。ではいったいどこの地域で左右が入れ替わるのだろうか、その場所は必ずあるのである。それを見届けたいのである。

沢木耕太郎の深夜特急というノンフィクションがある。筆者の沢木自身がインドからイギリスまでを路線バスで旅する旅行記で、バックパッカーの旅のバイブルとも言われている。

その中でアジアとヨーロッパの境目はどこだろうということに着眼をしているくだりがある。一般的には文明の十字路と呼ばれるトルコ、それもイスタンブールと答えるのが普通であるが、沢木はお茶をどのように書くかでその解を得ている。日本や中国でお茶は「Cha」であるが、ヨーロッパでは「Tea」である。この C から T に変わるところがアジアとヨーロッパの境だろうと言っている。そして、そこはイスタンブールではない。

連続する歩き旅だからわかること、そんなことをテーマの一つにするのも面白い。

そして連続する歩き旅は、他の電車やバスの旅に比べて達成感が全く違う。疲れは残るものの、この達成感を一緒に歩く連れ合いと共有できるのである。今までにない感動を与えてくれる。

そう、人生は一人ではないということを見せてくれるような気がする。

さあ、次はどこを歩こうか。帰途の電車の中で思う。

■旅の記録

- | | | |
|-----------|---|--------|
| 11月29日(日) | 昼、自宅を出て電車で甲府へ、
武田神社参拝し、ビジネスホテル宿泊(6400円) | |
| 11月30日(月) | 甲府駅前出発し山梨市三富川浦温泉へ
山県館宿泊(27300円) | 41895歩 |
| 12月1日(火) | 雁坂トンネルの出口まで宿の車で送ってもらい
三峯神社宿坊の興雲閣宿泊(24060円) | 30837歩 |
| 12月2日(水) | 三峰神社旧表参道を下山し秩父市荒川日野へ
ちちぶ温泉はなのや宿泊(30240円) | 34515歩 |
| 12月3日(木) | 秩父神社と西光寺参拝後に長瀬まで歩き、
宝登山神社参拝、電車にて長瀬から秩父に戻る
秩父夜祭り見物後、秩父鉄道にて熊谷駅に夜着
熊谷駅近くのビジネスホテル宿泊(8600円) | 32867歩 |
| 12月4日(金) | 電車で長瀬まで引き返し、長瀬から熊谷まで歩く
熊谷駅より電車で帰宅 21時 | 51643歩 |

歩数合計 191757 歩 (約 140km)、一日平均 38351 歩 (約 28 km)

宿泊費用は全て 2 人分